

読みのバージョン（４）

— 言説創造の現場へ —

2018

竹村 信治

広島大学附属中・高等学校
「中等教育研究紀要」第65号別刷

読みのヴァージョン (4)

— 言説創造の現場へ —

竹村 信治

本稿では、国語科の「読むこと」の授業過程を“パフォーマンス課題－評価”の教育評価過程と捉え、コンピテンシー育成に向けてパフォーマンスの「質」、ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点を検討する考察の第4稿である。「読むこと」におけるパフォーマンスの「質」には、“読み”の型(=読み方)が深くかかわっている。ここでは、第1稿でモデル化した“読みのヴァージョン”の第Ⅲヴァージョンを踏まえて、テキスト形成の言語過程における言説創造の現場に接近する“読み”を取り上げ、これにそくした観点試案を提示した。

1. はじめに

本稿は、国語科の「読むこと」の授業過程を“パフォーマンス課題－評価”の教育評価過程と捉え、コンピテンシー育成に向けて学習者のパフォーマンス(=“読み”)の「質」、ひいては認知プロセスの「質」を評価する一般評価基準¹⁾の観点を検討する考察の、第4稿である。

第1稿²⁾では、「読むこと」におけるパフォーマンス評価の観点を「読むこと」の認知プロセス(“読み”の処理工程road map)に即して³⁾、

- テキスト内部の読解=表層のテキスト形式
 - A 概念的知識
 - ①情報の取り出し
 - (1)表層構造分析
 - (2)命題構成
- テキスト内部の読解=命題的テキストモデル
 - B 手続き的知識
 - ②幅広い一般的な理解の形成
 - (3)命題統合
 - (4)マクロ命題(構造)構成
- テキスト内部の読解=状況モデル
 - C 推論とストラテジー
 - ③解釈の展開
 - (5)文脈モデル
 - (6)エピソード的モデル
- テキスト外部の知識を関係づける読解
 - D コミュニケーション
 - ④テキスト内部(文脈)の熟考
 - ⑤テキストの形式(構造)の熟考
 - (7)問いの生成
 - E 洗練度
 - ④テキスト内部(文脈)の評価
 - ⑤テキストの形式(構造)の評価
 - (8)対話

と整理し、その「質」、すなわち「子ども思考と表現」⁴⁾(=“読み”)の「質」には、“読み”の型(=読み方)が深くかかわっていると、以下のように“読み”のヴァージョンの3類型をモデル化し、それらの階層性にそくした観点試案を提示した。

【ヴァージョンⅠ(観点:物語内容の概念的理解)】

*パフォーマンス

言語体(文字列)と認知されたtextに、文法的要素、状況的要素にかかわる問いが読者によって投げかけられ、それが読者の文法的要素、状況的要素をめぐる既有知識の賦活、適用を通じて解決されるなかで、話題内容が概念的に把握される。

*パフォーマンス(思考と表現)の位相⁵⁾

文法的要素、状況的要素にかかわる既有知識の活用による物語内容の概念的な“理解”に止まり、textとの対話も私的な知識・体験に基づく感想(共感/違和感)の範囲に限られ、物語内容の概念的理解に対応する「価値観・世界観(ものの見方・考え方・感じ方など)」が他人事として知識化され、確認、表明される。

*コンピテンシー⁶⁾の質

textの概念的理解に関わる力に留まり、「社会生活」への展開力となるコンピテンシー育成への回路は閉ざされている。

【ヴァージョンⅡ(観点:問題領域をめぐる対話)】

*パフォーマンス

ヴァージョンⅠでの話題理解から“語り方”への注目に進み、テキスト内対話を再構成し、その対話に参加して自ら応答する。

*パフォーマンス(思考と表現)の位相

物語言説(=語り方=振る舞い方)への注目によ

る物語内容の“解釈”を通じて、“読み”はtext (= 他者) の「真理請求」⁷⁾ (「それ自身から語る」, 「《わたし》に対して振る舞う」《あなた》の「真理請求」⁸⁾) を経験する場となり, 《あなた》の「真理請求」(「価値観・世界観 (ものの見方・考え方・感じ方など)」) を「ある問いに対する答え」として理解して「問いの地平」を獲得し⁹⁾, さらにその「問い」 (= 問題領域) に自ら応答して「《わたし》に対して振る舞う」text (= 他者) と対話することを通じて自身の考えを深めていく¹⁰⁾。

*** コンピテンシーの質**

「社会生活」にかかわる対話力の育成に参与する。具体的には、「問いの地平」の獲得を通じた人間・社会・自然 (= 世界) をめぐる問題領域への接近によって「社会生活」を主題化する力, 問題領域をめぐって応答し対話する力, その応答・対話の間に既有知識 (問題領域をめぐる公共的「知識・体験」) を収集し活用する力, そこで自らをメタ化する力, そして何より, それらの基底にあってコンピテンシーの根幹をなす他者 (《あなた》) との“対話”力に参与する。

【ヴァージョンⅢ (観点：物語行為への批評)】

*** パフォーマンス**

我々の棲まうこの世界を“パフォーマンス課題”と見なし, textを「ある特定の文脈のもとで, 様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品」¹¹⁾ (= パフォーマンス) と見なす, すなわち, 生活世界と対峙して問いを引き出し, これに既有知識を参照しつつ語り手を仮構して応答し

たパフォーマンス (「真理請求」) と捉えて, そうしたtext生成の間の言語行為主体 (作者 = 著作家 écrivain¹²⁾) の物語行為の在りようを, 自らの既有知識 (物語行為をめぐる「知識・体験」) を活用しつつ批評する。

*** パフォーマンス (思考と表現) の位相**

生活世界を“パフォーマンス課題”として遂行されるパフォーマンス (= text) を批評するパフォーマンス。世界に生起する諸事象をめぐる問いの位相 (既成の問いの流用 / 新たな問いの発見) を問題化し¹³⁾, 他方, これへの応答については, 世界に流通する応答の仕方 (解釈モデル = 言説¹⁴⁾) の踏襲や再生, 解釈モデルとの差異を仕掛けたパロディ, “エクリチュールの零度”¹⁵⁾ での生活世界との対峙, 対話といった位相差を見分け, textの生成を領導した物語行為全体 (= 問い / 応答) をそのありようにおいて評価する。

*** コンピテンシーの質**

言語行為主体の物語行為における問いと応答の対話過程の批評, 評価を通じて, コンピテンシーの中核をなす“問い—応答”, すなわち「生活世界」との対話力の育成に参与する。さらに, この対話力を「言説の資源」¹⁶⁾ として参入する公共空間 (= 「社会生活」) における言説創造の言語行為 (= 言述) を洗練させていく力に参与する。

この3類型を“読み”の階層として構造化すると以下ようになる。

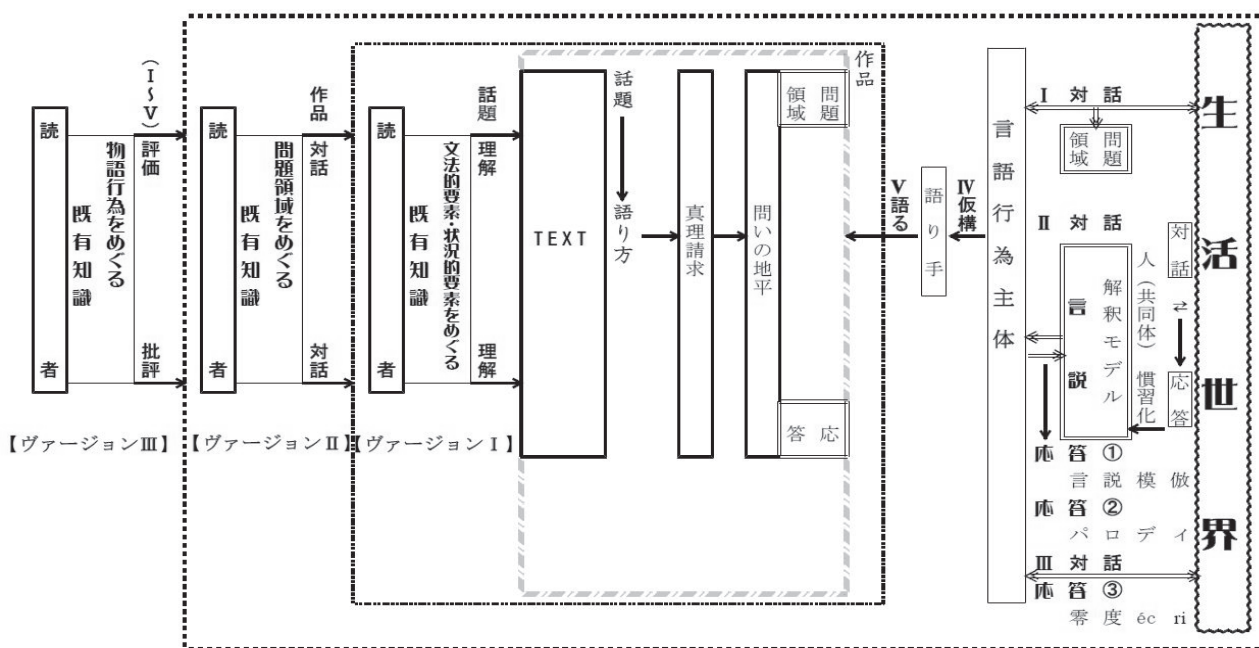


図1 読みのバージョン (I~III)

左記のⅠ～Ⅲは“読み”（「子ども思考と表現」）のパフォーマンスの「質」を評価する上での観点だが、「読み」の深度を評価するルーブリックでもある。この内、もっとも深い“読み”（＝「深い学び」）となるⅢについては、さらに図1中のⅣの「仮構」される「語り手」、Ⅴの「語る」行為に着目する“読み”，すなわち“言語過程の批評”をオプションとして更に加えることができる。第2稿¹⁷⁾では『更級日記』を例にⅤを、第3稿¹⁸⁾では『枕草子』を例にⅣを取り上げた。

【言語過程の批評】

i 語りのダイナミズム—言説との葛藤

*パフォーマンス

生活世界に生起する諸事象にかかわる“パフォーマンス課題”への応答をめぐる、世界に流通する諸言説に取り巻かれながら語り書き続けて思索が展開される、テキスト生成の動的な言語過程を追跡する。

*パフォーマンス（思考と表現）の位相

揺らぎ、変転、錯綜を伴って展開する言語行為主体（作者＝著作家écrivain）の思惟の動態を精緻に把握し、諸言説との葛藤のなかで世界を問い応答（＝真理請求）し続ける人の生の現実への理解を深める。

*コンピテンシーの質

諸言説の流通する「社会生活」の中で生活世界と対峙して自己の生き方、社会との向き合い方を考え続けていく力に関わる。

ii 作者écrivainへの接近

*パフォーマンス

テキストと同時に誕生して言語活動を維持する主体である「語り手」¹⁹⁾と、「言語（ランゲージュ）をコミュニケーションの道具、思想の伝達手段として用いる、つまり語り（パロール）を手段として他動詞的に書く」《著述家écrivain》の対語である「ただひたすら語りを練り上げることによって、目的なしにいわば絶対的に自動詞的に書く作家」である《著作家écrivain》²⁰⁾（＝「作者（「言語行為主体）」）とを区別した上で、「語り手」を仮構して語りを練り上げ自動詞的に書き続ける「作者（「言語行為主体）」がテキスト生成の言語過程で何を経験しているのかを探る。

*パフォーマンス（思考と表現）の位相

仮構された「語り手」が遂行する語り引き起こす出来事（＝「文学という経験」²¹⁾）、その出来事と出会う「言語行為主体」の思惟、そこから再び仮構される「語り手」と新たな語りの実践、そうしたエクリチュールのさなかで出来している事態

を精緻に把握して、書くことを通じて世界と自己を問いつける人の生の現実を理解する。

*コンピテンシーの質

世界と対峙しエクリチュール（＝パフォーマンス（思考と表現））を通じて世界と自らの生を問いつける他者と出会う力とともに、そうした出会いの中で「社会生活」における自らのパフォーマンス（思考と表現）を洗練させていく力に関わる。

さて、こうした“読み”のヴァージョンを階梯として可能となるのがtextの批評と評価だが、それは見てきたような物語行為（＝問い／応答）とその言語過程を通じて生成されるtextの言説について、これをその言説創造の現場に立ち会いつつ批評、評価する“読み”において可能となる。本稿では、そうした“読み”について、以下、『徒然草』を例に検討する²²⁾。

2. 『徒然草』の無常観言説

『徒然草』はいくつかの段で無常を話題にする。兼好法師という言語行為主体は、生活世界との対話の中で“無常”を問題領域として問い、これに折々に応答しているわけだが、その折々のエクリチュールが生成する無常観言説が、第30段前後を境に〈詠嘆の無常観〉（＝無常感）から〈自覚的（諦観的）無常観〉（＝無常観）への展開をもっていることはよく知られている²³⁾。そこではこれを根拠にtextの2段階成立も説かれる。他方、「若年時代から書きはじめられた『徒然草』はおそらく兼好の晩年にいたるまで折にふれて記しとどめられた」として「その長い執筆期間にわたっての状況の激変、あるいは境遇の転変に対応しながら、兼好は試行錯誤をくりかえすとともに体験を積みかさね思索を深めていった」とする見解もある²⁴⁾。『徒然草』の語りに着目して語り手、そしてその語り向き合う言語行為主体の動態をうかがう時、その《著作家écrivain》のありようは後者の見解を支持している如くであって、このことはほかならぬ無常観言説の展開においてよりよく確かめることができる²⁵⁾。

〈詠嘆の無常観〉（＝無常感）をうかがわせるのは、次の第7段冒頭の語りである。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにものあはれもなからん。世の中は定めなきこそいみじけれ。

これは、生と対立し忌避すべきものとして捉えられ

た無常（〈詠嘆的無常観〉（＝無常感）を〈もの
のあはれ〉の美的観念によって乗り越えようとしたも
の。そこには、『古今集』の小町歌「あはれてふ言（こ
と）こそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ」
（雑歌下・九三九）を逆説的に敷衍して無常を〈もの
のあはれ〉＝美的観念へと回収し、「世は定めな
きこそ、いみじけれ」との自己同定を果たすあり様
が見て取れる²⁶⁾。

次に第49段の一節。

人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと
懸けて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、な
どか、この世の濁りも薄く、仏道をつとむる心も
まめやかならざらん。

続いて第58段、第59段それぞれの末段。

人と生れたらんしるしには、いかにもして世を通
れんことこそ、あらまほしけれ。ひとへに貪るこ
とをつとめて、菩提におもむかざらんは、よろづ
の畜類に変る所あるまじくや。（第58段）

近き火などに逃ぐる人は、「しばし」とや言ふ。
身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨て
て逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常
の来ることは、水火の攻むるよりも速かに、逃れ
がたきものを。その時、老いたる親、いとなきな
き子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざら
んや。（第59段）

また、第74段。

蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る人、
高さあり、賤しきあり。老いたるあり、若きあり。
行く所あり、帰る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。
いとなむ所何事ぞや。生を貪り、利を求めて、や
む時なし。

身を養ひて何事をか待つ。期するところ、ただ
老と死とにあり。その来ること速かにして、念々
の間にとどまらず。これを待つ間、何の喜びか
あらん。惑へる者はこれを恐れず。名利に溺れて、
先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人は、
また、これを悲しむ。常住ならんことを思ひて、
変化の理を知らねばなり。

そして、第137段。

（上略、葵祭の見物の様を述べて後）かの棧敷の

前をこら行き交ふ人の、見知れるがあまたある
にて、知りぬ、世の人数もさのみ多からぬにこそ。
この人みな失せなん後、わが身死ぬべきに定まり
たりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大きな器
に水を入れて、ほそき穴をあけたらんに、滴ること
少しといふとも、おこたる間なく洩りゆかば、
やがて尽きぬべし。都の中に多き人、死なざる日
はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。
鳥部野・舟岡、さらぬ野山にも、送る数多かる日
はあれど、送らぬ日はなし。されば、棺を嚮く者、
作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強き
にもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで逃
れ来にけるは、ありがたき不思議なり。しばしも
世をのどかには思ひなんや。（中略）兵の軍に出
づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身
をも忘る。世を背ける草の庵には、閑かに水石を
翫びて、これをよそに聞くと思へるは、いとはか
なし。閑かなる山の奥、無常のかたき、競ひ来ら
ざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進める
に同じ。

見られるとおりに、これらには〈ものあはれ〉＝美
的観念による無常の慨嘆の回収が認められない。無
常迅速の恐懼のうちに「世は定めなきこそ、いみじ
けれ」との自己同定も破綻し、遁世による仏教的救
済を想い（第49段）、出家を果たし（第58段）、出家
を勧め（第59段・第74段）、しかもなお「閑かなる
山の奥、無常のかたき、競ひ来らざらんや。その死
に臨めること、軍の陣に進めるに同じ。」とその境
涯にも安住できない（第137段）、そうした言説がこ
こでは繰り返されている。

これらは第30段前後以降の章段だが、その切迫し
た語りは諦観に根差すというよりKarl Jaspersの所
謂「現存在的不安」（＝「死を前にしての感覚的な
不安」²⁷⁾）をこそよく伝える。したがってその無常
観は〈詠嘆的無常観〉（＝無常感）の範囲内にある
というべく、従来の議論に言う〈自覚的（諦観的）
無常観〉（＝無常観）は第155段に至ってようやく鮮
明となる。以下はその後半部。

春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るには
あらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋
は通ひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天
気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つ
るも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌し
はつるに堪へずして落つるなり。迎ふる気、下に
設けたるゆゑに、待ちとるついで甚だ速し。

生老病死の移り来ること、またこれに過ぎたり。

四季はなほ定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来たらず、かねて後ろに迫れり。人皆死あることを知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覺えずして来たる。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし。

後半の「死は前よりしも来たらず、かねて後ろに迫れり。」は先の「無常の来ること」(第59段)「その来ること速かにして、念々の間にとどまらず。」(第74段)「無常のかたき、競ひ来らざらんや」(第137段)と好対照をなす無常(死)認識だが、「迎ふる気、下に設けたるゆゑに、待ちとるついで甚だ速し。」もまた、生を犯す「かたき(敵)」(=刹鬼)としての無常(死)の切迫に慨嘆する無常感と異なり、人間の存在をおのずから死を運命付けられたものと捉え、生の歩みが必然としての死への道行きにほかならないことを言い当てたものとなっている。これをKarl Jaspersにならって「実存的不安」(=「本来的な意味において全く存在していないという深淵の前に立つ」不安)²⁸⁾と呼ぶことができるかどうかはともかく、こうした言説こそが〈自覚的(諦観的)無常観〉(=無常観)と称するにふさわしかろう。そうした言説は、第166段にも認められることだった。

人間の営みあへるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉の飾りを営み、堂を建てんとするに似たり。その構へを待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪の如くなるうちに、営み待つこと甚だ多し

また、『徒然草』の最末尾直前の第241段も、この無常観をうかがわせる言説をもって語り始められる。

望月の円かなることは、しばらくも住せず、やがて欠けぬ。心とどめぬ人は、一夜の中にさまで変るさまも見えぬにやあらん。

かくして、如上の無常観関連章段の言説は、無常を生と対立し忌避すべきものとして捉え、それを〈ものあはれ〉の美的観念によって乗り越えようとするところから、無常感の切迫のうちに出家遁世を果たし、無常を〈敵〉と見做してこれに対峙するところへと変転し、第137段においてそのような出家遁世による無常感の克服に疑念を抱き、やがて第155段以降の死を生に内在するものとして受け入れ諦観をもってその事態と向きあうところへといたる、そうした展開相を、したがってその間の言説創造にかかわる言語過程の動態を教える。

3. 無常感／観をめぐる言説創造の現場

あらためて述べるまでもないことだが、ここで取り上げている無常観関連章段は、先にも述べたとおり、兼好法師と言う名の言語行為主体が生活世界における“無常”をめぐる問い(=問題領域)について応答した、その場面の一々の記録である。もちろん、応答しているのは兼好法師が仮構した語り手である。兼好法師は仏教由来の“無常”という既成の、しかし現存在にとって何時の世にも切実な問題領域を我が事として引き受け、この問いに折々の語り手の言述をもって応答していく。

第7段の応答が平安王朝人の言説を主体化した語り手の言述であることは、それが小町歌の逆説的敷衍であるところに明らかである。小町歌にある「世の中を思ひ離れ」る、すなわち“出家遁世の境涯による無常の克服”は『万葉集』の「生死の二つの海を厭はしみ潮干の山を偲ひつるかも」(巻一六・三八四九)、「うつせみは数なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな」(巻二〇・四四六八)以来くりかえし喧伝されてきた仏教言説だが、平安の王朝人は、「しかりとて背かれなくに事しあればまづ嘆かれぬあな憂世の中」(『古今集』雑歌下・九三六)と、これに身を委ねることのできない人のあり様を見つめ続け、そこにこそ〈ものあはれ〉を認め共感を寄せてきた(『伊勢物語』の昔男、『源氏物語』の光源氏など)。歌人でもある兼好はそうした王朝の言説を担う語り手を仮構して、無常感を〈ものあはれ〉=美的観念へと回収するのである。

「あはれてふ言こそうたて」「しかりとて背かれなくに」、しかしそうした出家逡巡の言説は12世紀の動乱を経てやがて姿を消し、遁世をめぐる言説が中世のtextに横溢していく。上に見た第47段、第58段、第59段、第74段などはそうした言説に泥む語り手の所産であろう。そのことは、「人と生まれたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。ひとへに貪る事をつとめて、菩提におもむかざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。」(第58段)、「大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。」(第59段)として激しく出家を迫る発話が『発心集』『撰集抄』の話末評論部分や諸注の指摘する『正法眼蔵随聞記』(六)などに散見されるところに確かめられるが、これら諸段の語り手にもっとも近い相貌を保つのはやはり鴨長明であろう。長明『方丈記』には有名な次の言述があった²⁹⁾。

ヲホカタ、コノ所ニ住ミハジメシ時ハ、アカラサ
マト思ヒシカドモ、今スデニ、五年ヲ経タリ。仮
ノ菴モヤ、故郷トナリテ、簷ニ朽葉フカク、土居
ニ苔ムセリ。自ヅカラ事ノタヨリニ都ヲ聞ケバ、
コノ山ニ籠リ居テノチ、ヤムゴトナキ人ノカクレ
給ヘルモ、アマタ聞コユ。マシテ、ソノ数ナラヌ
タゲヒ、尽クシテコレヲ知ルベカラズ。タビノ
炎上ニ滅ビタル家、又イクソバクゾ。タゞ、仮ノ
菴ノミ長閑ケクリテ、恐レナシ。

『徒然草』の言語行為主体が長明の著述に親しんだことは、第138段の「鴨長明が四季物語にも、『玉垂に後の葵はとまりけり』とぞ書ける。」の記事や第188段に長明『無名抄』所載の登蓮法師譚が引用されているところに確かめられるが、次の『発心集』巻第二第11段「或る上人、客人に値はざる事」もその一例である³⁰⁾。

年来、道心深くして、念仏おこたらぬ聖ありけり。相ひ知りたりける人の、対面せんとて、わざと尋ねて来たりければ、「大切に暇ふたがりたる事ありて、え会ひ奉るまじき」と云ふ。

弟子、「あやし」と思ひて、其の人帰りて後、「など、本意なくては帰し給へるぞ。さしあふ事も見え侍らぬを」と云へば、「あひがたくして人身を得たり。此の度、生死を離れて、極楽に生れんと思ふ。是、身にとりて、極まりたる営みなり。何事か、是に過ぎたる大事あらむ」とぞ云ひける。

此の事、あまりきびしく覚ゆるは、我が心の及ばぬなるべし。

坐禅三昧経に云はく、

今日當此事 明日造彼事

樂著不観苦 不覚死賊至云云

世の中にある人、さすがに後世を思はざるなし。「今日は此の事をせん。明日は彼の事を営まん」と思ふほどに、無常のかたきのやうやく近づきて、命を失ふ事をば知らざるなり。

『徒然草』第137段末尾の「無常のかたき」は、この『発心集』が『坐禅三昧経』の「死賊」に与えた訳語「無常のかたき」を踏まえたものであろう³¹⁾。長明に親昵する『徒然草』の言語行為主体はこうして語り手に長明語彙を語らせるのである。さらに、このようにして長明を主体化して語る語り手の姿は『徒然草』第59段にも見出だされる³²⁾。先の本段引用の前段には以下の一節がある。

大事を思ひ立たん人は、さがたく、心にかから

んことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。「しばし、このこと果てて」、「同じくはかのこと沙汰し置きて」、「しかしかのこと人の嘲りやあらん。行末難なくしたためまうけて」、「年来もあればこそあれ、そのこと待たん、ほどあらじ。もの騒がしからぬやうに」など思はんには、えさらぬことのみいとど重なりて、ことの尽くる限りもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心ある際は、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

これが『発心集』巻第二第11段に所引の『坐禅三昧経』偈の「今日當此事 明日造彼事」あるいはこれを解説した『発心集』の「世の中にある人、さすがに後世を思はざるなし。今日は此の事をせん。明日は彼の事を営まんと思ふほどに」をパラフレーズした言説であることは明らかである。そして、先に掲げた『徒然草』第59段後段は、『坐禅三昧経』偈の後二句「樂著不観苦 不覚死賊至」、『発心集』の「無常のかたきのやうやく近づきて、命を失ふ事をば知らざるなり。」からの言説の創造だった。

ところで、こうして『発心集』の語彙を踏襲し言説を敷衍する語り手を仮構する『徒然草』の言語行為主体は、しかしその一方で別の言説をも参照する。『徒然草』第49段では、先の引用に続く件りで、『発心集』巻第二第11段前半の話題が次のように語られている。

人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと懸けて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などか、この世の濁りも薄く、仏道をつとむる心もまめやかならざらん。

「昔ありける聖は、人來たりて自他の要事を言ふ時、答へて云はく、『今火急のことありて既に朝夕にせまれり』とて、耳をふたぎて念仏して、つひに往生を遂げけり」と、禅林の十因に侍り。

両者の間には話題構成に顕著な相違がある。『徒然草』譚は「禅林の十因に侍り。」との出典注記通り、永観（禅林寺所住、1033-1111）『往生拾因』第一「一心稱念阿彌陀佛、廣大善根故必得往生」の次の記事を参照したものである³³⁾。

夫未出三有火宅、雖朝暮之悲歎、今值大善名號、是一生之大慶。豈不棄衆事念佛號哉。若今生空過、出離何時。

傳聞、有聖、念佛爲業、專惜寸分。若人來謂自他要事、聖人陳曰、今有火急事、既逼於旦暮。塞耳

念佛，終得往生。

『徒然草』の言説創造の現場は既成言説の一元的な再生ではなく、他言説の参照の場でもあったと言う次第だが、このことは先に引用した第137段の言述においてより顕著に認めることができる。

世を背ける草の庵には、閑かに水石を翫びて、これをよそに聞くと思へるは、いとかなし。閑かなる山の奥、無常のかたき、競ひ来らざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるに同じ。

ここに言う「世を背ける草の庵」は前引『方丈記』の「仮ノ菴ノミ長閑ケクリテ、恐レナシ。」の「仮ノ菴」のことだろう。長明語彙を再生する『徒然草』の語り手は、しかしそれを「閑かに水石を翫びて、これをよそに聞くと思へるは、いとかなし。」と否定する。この否定は次の『往生拾因』序の参照に基づくものだった。

夫出離之正道，其行非一。西方之要路，末代有縁。然貪著於名利，發心惟難，馳騁於四方，坐禪無人。嗟乎，去去不來盛年，殘日稍闌，來來無去衰齡，餘年復幾。是以澄心於小水魚，歎露命日日減。係念於屠處羊，悲無常之步步近。況乎世間春來夢，榮華何實，人身水上漚，浮生誰留。隱山海仙，未免無常之悲，籠石室人，終遭別離之歎。實一生假棲，豈期永代乎。而今倩思，受何病招何死哉，重病惡死一何痛哉。雪山不死藥驗失，耆婆醫王方術盡。無常暴風，不論神仙，奪精猛鬼，不擇貴賤。生死必然，誰人得免。（大正新修大藏經第八十四卷による）

第137段の「無常のかたき」は『発心集』における『坐禪三昧経』の「死賊」訳語であると同時に、『徒然草』の言語行為主体がこれをもって『往生拾因』序の「無常暴風」「奪精猛鬼」に与えた訳語でもあった。

『徒然草』の無常観言説は、第137段における長明“草庵の榮華”³⁴⁾の否定、超克を契機として第155段以降の〈自覚的（諦観的）無常観〉（＝無常観）へと展開する。死を生に内在するものとして受け入れる諦観をもってその事態と向きあう“無常観”。それは上の「禪林の十因」、すなわち永観『往生拾因』序に唱えられる「實一生假棲，豈期永代乎」「生死必然，誰人得免」に示される観念でもある。こうして『徒然草』の言語行為主体は、長明への親昵を回路として永観へと帰着し、それぞれの言説を語り手に担わせつつ遂行する語りを通じて無常感から無

常観への思惟の変転深化を経験する。『徒然草』生成の言語過程における言説創造の現場とはたとえばこのようなことである。

4. おわりに

鶴見俊輔はその漫画論の中で、パロディとは「いくらかちがう様式」としてのバーレスク（「何かの原作の形だけをまねて、それをおかしいものにして見せる方法」）を取り上げている³⁵⁾。アイザック・ディズレーリ『文学の珍談集』（1791）によればその起源は次のようなことだったという。

ホーマーの詩を口ずさみながら町から町へとさまよって行った吟遊詩人たちのすぐあとから、べつの一隊のさまよひびとがつづいてた——それは道化師たちであって、（先に行った吟遊詩人の）おごそかなしらべをもじったり、茶化したりすることによって見物人をよろこばせたのである。

そして、鶴見は、漫画家・富永一朗をバーレスク詩人とみなして、次のようにも述べている。

大衆が、新聞やラジオからおくりつけられる紋切り型の言葉で、考え方のわくをつくられるという側面は、ウォルター・リップマンの『世論』（一九二二年）このかた言われてきたものだが、その紋切り型の言葉を用いてしかも自分の意見を言わず、しかも相当程度まで新聞・ラジオの送り手とはちがう意見を同じ紋切り型をとおして言い得ている場合もある。新聞やラジオやテレビを、ホメーロスの時代の吟遊詩人に見たてるならば、そのあとにくっついて歩いて、前に行った人たちの言ったことをひっくりかえしてうらの意味を明らかにするバーレスクの詩人たちの一行もまた同じマスコミの一隅をかりて営業がなりたつ。

言説創造の現場はいつもこうして既成言説の模倣、再生、ずらし、ひっくりかえしとともにある。そして他言説の参照、そこでの葛藤、競合、再構成、再創造……。語り手が遂行する語り引き起こすこうした出来事と出会いながら、言語行為主体は問題領域への接近、応答を繰り返す、生活世界をめぐる思索を深化させていく。textの批評、評価とはその“深化”の如何を問うことであろう。そうした問いかけこそが「社会生活」に参与して「社会生活」を問い、「社会生活」を創造していくコンピテンシーの育成に関与することは言うまでもない。

コンピテンシー育成に向けて学習者のパフォーマンス (= “読み”) の「質」、ひいては認知プロセスの「質」を評価する一般評価基準¹⁾の観点たる“読み”のバージョンは、こうして、おそらくはこの言説創造の現場に立ち会う批評、評価をもって完結する。

注

- 1) ルーブリックには、ある教科や領域で共通する「一般評価基準」と、それをもとに課題ごとに作っていく「課題別評価基準」があるが、本稿では前者を考察の課題とする。松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』(日本標準ブックレットNo.7, 日本標準, 2007, p.23)による。
- 2) 竹村「読みのバージョン—パフォーマンス評価の観点—」(『中等教育研究紀要』62, 2016.3, 広島大学附属中・高等学校)
- 3) ①などの丸数字を付した項目はPISA型読解力のプロセス, (1)などの括弧付数字のそれはvan Dike, T.A.とKintcsh, W. のモデルによる。前者については、『PISA2006年調査・評価の枠組み』(OECD, 明石書店)に表示解説される「読解力の5つのプロセス(側面)」(二〇〇六年調査), 『PISA2009年調査・評価の枠組み』(同)「読解力の枠組みと側面の下位尺度との関係」(二〇〇九年調査)によった。なお, 秋田喜代美・藤江康彦『授業研究と学習課程』(放送大学教育振興会, 2010)第4章, 参照。後者は, 秋田喜代美「文章理解」(内田伸子編『新・児童心理学講座第6巻・言語機能の発達』所収, 金子書房, 1990)によった。Kintcshによるモデル改良理論である「構築—統合モデル」をも適宜参照した(楠見孝編『現代の認知心理学3 思考と言語』〈北大路書房, 2010〉第4章「言語と思考に関するコネクションモデル」(都築誉史, 執筆))。なお, 甲田直美『文章を理解するとは—認知の仕組みから読解教育への応用まで—』(スリーエーネットワーク, 2009)第4章, 参照。
- 4) 注1, 松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』, 参照。
- 5) パフォーマンスの位相については, “パフォーマンス評価(performance assessment)”の定義「ある特定の文脈のもとで, 様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品を, 直接的に評価する方法」(注4, 前掲書, p.6)にいう「様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品」の質的位相としてあつかう。
- 6) コンピテンシーについては「社会生活において,

- 人が本来もっている知識をどれだけ実際に行動に移して活用していくことができるかの力」との基本定義(Patrick Griffin, Barry McGaw, Esther Care原編著・三宅なほみ監訳・増川弘如, 望月俊男編訳『21世紀型スキル—学びと評価の新たな私たち』2012, 北大路書房, 2014, pp.vii)にしたがう。
- 7) H-G Gadamer原著・轡田収, 卷田悦郎訳『真理と方法Ⅱ—哲学的解釈学の要綱』1960, 第4版1975, 法政大学出版会, 2003, 同書訳註*108, p.664, 参照。なお, Jürgen Habermasはその著『コミュニケーション的行為の理論』第三章第一(原著1981, 岩倉正博・藤澤賢一郎訳, 未来社, 1986)で, 「妥当要求」(「真理性・正当性・誠実性」)をめぐる可謬主義的「討議」を唱えたが(pp.48-49), この「妥当要求」もH-G Gadamerの「真理請求」と相同的である。
 - 8) 注7, 同第二部第2章第3節b「経験の概念と解釈学的経験の本質」問いの解釈的優位」β, p.553
 - 9) 注8同, 前掲書, pp.571-572
 - 10) H-G Gadamerは前掲書において次のように述べている。「問うことはつねに, さまざまな可能性が宙に浮いて, 未決定であることを明らかにする。(中略)考えようとする者は自ら問わなければならない。(中略)問うことによって, 意味の可能性が開かれ, それによって, 意味に富んだことが自分自身の考えに受け継がれる。」(注8同, pp.578-579)
 - 11) 注5同。
 - 12) Roland Barthes『エクリチュールの零度』(原著, 1953) I「政治的なエクリチュール」等。森本和夫・林好雄(訳註, 1999, ちくま学芸文庫)の訳語による。竹村「文学という経験—教室で」(『文学』15-5, 2014.9, 岩波書店)注1及び同「読みのバージョン(3)—作者écrivainへの接近」(『中等教育研究』64, 2018. 3, 広島大学附属中・高等学校)注6, 参照。
 - 13) 注7 H-G Gadamer著書にいう「見せかけの問い」/「問われた事柄の未決性」(注8同, p.562)。なお, 國分功一郎『ドゥルーズの哲学的原理』(岩波書店, 2013. 初出『思想』1060号, 岩波書店, 2012.8)には, 「重要なのは, 問題を解決すること以上に, 問題を発見すること, 問題を適切な仕方提起することである。」とある(p.101)。なお, 國分著書第三章2「思考の習得と方法」も参照のこと。
 - 14) 竹村『言説論—for説話集論』(笠間書院, 2003), 参照。
 - 15) 注12同。
 - 16) 齊藤純一『公共性』(岩波書店, 2000)

- 17) 竹村「読みのヴァージョン—語りのダイナミズムへ—」(『中等教育研究紀要』63, 2017.3, 広島大学附属中・高等学校)
- 18) 竹村「読みのヴァージョン—作者écrivainへの接近—」(『中等教育研究紀要』64, 2018.3, 広島大学附属中・高等学校)
- 19) Roland Barthes「作者の死」(1968)はこれを〈書き手scripteur〉とする。注12, 参照。
- 20) 引用は注12同上書の訳註(I 33)による。
- 21) 竹村「文学という経験—教室で—」(『文学』15-5, 2014.9, 岩波書店)
- 22) 『徒然草』の本文引用は小川剛生訳註『新版徒然草』(角川ソフィア文庫, 2915. KADOKAWA)による。
- 23) 西尾実(『つれづれ草文学の世界』(1964, 法政大学出版局), 安良岡康作『徒然草全注釈』(1968, 角川書店))
- 24) 永積安明『徒然草を読む』(1982, 岩波書店)
- 25) 以下の論述の詳細は, 注14同署, III ivを参照されたい。
- 26) Karl Jaaspers原著・小倉志祥, 林田新二, 渡辺二郎抄訳『哲学』(1932, 中公クラシックス, 2011. 5, 中央公論新社) 第三部第七章第二篇個別的限界状況「死」の「一 死についての知識と, 限界状況」には次の一節がある。
- ただたんに生きる者であるかぎりの私は, 目的を追求し, 私にとって価値あるいっさいのものの永続と存立に努力を傾ける。私は, 実現された善が潰滅に帰したり, 愛する存在者が亡び去れば, 悩む。私は, ものごとの終焉を経験しなければならないからである。けれども, 私は, 終焉の不可避性と, いっさいのものの終焉を忘れ去ることによって, 生きる。(p.379)
- 27) 注26, 同。なお, 藤田俊輔「ヤスパースの不安論」(『倫理学研究』43, 2011, 関西倫理学会), 参照。Karl Jaaspers同上書には次の一節がある。
- もしも実存が, 死に対する一義的に割り切った態度を採るならば, 死は, 実存の内実の確証であり続けることをやめてしまうのである。すなわち, そうした態度のひとつに, 非情な平静不動の態度というものがある。それは, もはや死に惑わされないような一点的な自己存在へと硬直することによって, 限界状況から免れようとするものである。またもうひとつ別に, 現世否定の態度がある。これは, 現世とは別の彼岸的生の幻想によって自分を欺きまた慰める態度である。(第三部第七章第二篇個別的限界状況「死」, 「三 私の死」, p.387)

- 28) 注26, 同。同書には次の一節がある。
- 実存的不安の内実をなしているような確信のみが, 現存在の不安を相対化することができる。実存の存在確信にもとづいてのみ, 生の欲望を支配することが可能となり, 死をまえにして落ちつきはらい, 終焉を知って悠揚平静さを失わないことが可能になるのである。ところがこれに反して, 実存が死んでしまっているような場合, つまり, 存在確信という信念が交わりを通して歴史的意識の中で実現されなかったような場合にこそ, はじめて, 生物的な死の見こみが, 完全な絶望になるのである。(第三部第七章第二篇個別的限界状況「死」, 「四 二重の不安」, p.392)
- また, 以下の一節も見える。
- 客観的な考察によったのでは, 私は, 死や無常か必然的に存在しなければならない理由を, 異論の余地のない形では, 理解することかできない。けれども, 実存の立場に立つならば, 現象の中におけるこの消滅という働きは, 実存に必要なものであることが分かる。かりにこの消滅の働きが存在しないとすれば, 私は存在の面で涸てしなく永続するものとなってしまい, 結局, 実存する者ではなくなってしまうからである。むろん, 私は, 現象の中で実存する者である以上は, 時間の中での現実化と決断とを, 絶対的に重要なものと見なさざるをえない。けれども, この消滅の働きを, 私はそのさいにただ受動的に眺めていることも許されないし, またそれを意図的に招き寄せることも許されない。そうではなく, 私は, その消滅の働きを, 内面的におのれのうちに取り入れて摺まえなければならなくなるのである。それゆえ, 死への憧れでもなければ, 死への不安でもなく, ほかならぬ現象の消滅の働きこそが, 実存の現前として, 真理となる。かりに私が, 現存在を, あたかもそれが存在自体であるかのように絶対的なものと見なして, その中に自分もすっかり取りこまれ, ついには私は健忘と不安の入りまじったたんなる現存在になりさがったとしたならば, そのときには私は実存を喪失するわけである。けれども逆に, もしも私が現存在の現象をどうでもよいものと見なして, ついにはそれを軽蔑し, その現象の消滅の働きがあろうとも何ら自分には関係したことはないとするならば, そのときにも私は逸脱してしまう。可能的実存として, 私が本当に現実的に存在するのは, ただひとえに, 私が現存在しつつ現象し, 現象のうちにあ

りながらも、しかし現象以上である場合に、限るのである。それゆえ、私は、現存在であるかぎりには、終焉の悩みを、たしかに廃棄することかできないけれども、しかし実存の確信において、同時にその悩みを克服することができ、すなわち、その悩みを支配しつくすことができるのである。死は、実存にとっては、当の実存が現存在した以上はその現存在が蒙らねばならない必然性であり、そうだというのも、実存の現象はつねに同時に真実ならざるものでありそうした現象は消滅せざるをえないから、である。(第三部第七章第二篇個別的限界状況「死」, 「一死についての知識と、限界状況」, pp.380-381)

- 29) 引用は佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』(新日本古典文学大系39, 1989.1, 岩波書店)による。
- 30) 引用は三木紀人校注『方丈記 発心集』(新潮日本古典集成, 1976. 10, 新潮社)による。なお、『徒然草』と『発心集』との依拠関係については、金文峰「『徒然草』における説話文学の影響について」(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』14, 2002. 11, 岡山大学大学院文化科学研究科)に考察がある。
- 31) 注30新潮日本古典集成の当該話頭注7にも指摘がある。
- 32) 以下については、竹村「中世説話論—何を問うのか」(李銘敬・小峯和明編『日本古典文学研究』(中国・日本学研究叢書, 2016. 12刊行予定未刊)に詳述した。
- 33) 引用はS A T大正新修大藏経テキストデータベース2015版による(八四卷)。以下の『往生拾因』の引用も同じ。
- 34) 唐木順三『中世の文学』(筑摩叢書, 1965, 筑摩書房)
- 35) 鶴見 俊輔・佐藤 忠男・北 杜夫編『富永一朗集』(第2期・現代漫画3, 1971. 3, 筑摩書房)。引用は松田哲夫編『鶴見俊輔全漫画論』1(ちくま学芸文庫, 2018. 5, 筑摩書房)3「バーレスクについて—富永一朗」による。